

---

K I S H I D A I A No.44 目 次

クモの住居拡大	中 平 清	1
長生きをしたクロガケヅグモ	田 中 穂 稲	4
コサラグモ2種について	佐 藤 幸 子	6
北緯50度線上報告(2)	小 野 展 瞬	9
研究雑記帳(1)	鈴 木 恵 一	14
道北紀行	熊 田 寂 一	17
北海道北部のクモ	熊 田 寂 一	23

D R A G L I N E —

未受精卵を食べるクモ	鈴 木 勝 浩	29
野帳から	蓮 沼 克 己	29

---

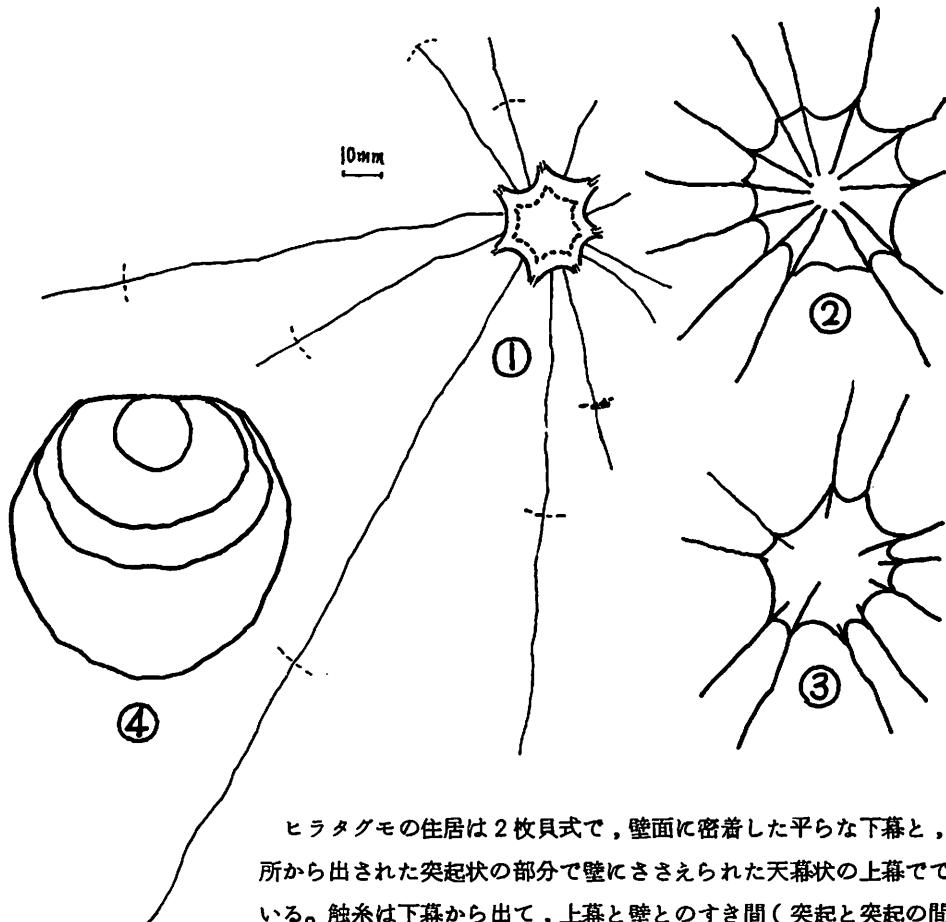
編集後記

---

# クモの住居拡大

中 平

清（高知県吾川郡春野町芳原600）



ヒラタグモの住居は2枚貝式で、壁面に密着した平らな下幕と、数個所から出された突起状の部分で壁にささえられた天幕状の上幕でできている。触糸は下幕から出て、上幕と壁とのすき間（突起と突起の間にあ  
る。）を通って壁面を走っている。住居の大きさは、成体での直径40mm内外、触糸の長さは100mmから400mmにもなる。

図①は、1978年10月7日に測定した幼体の住居と触糸を書いたものである。このクモは、日がたつにつれ、成長するにつれて住居を拡大し、触糸を伸ばす習性のあることは知っていたが、実測したことはなかったので、それを試みるために、年初めの1月18日に、住居上幕の周縁と触糸の先端にマジックインキで印をつけておいたものである。図の点線で表わしたのが1月に見た住居の大きさを示したものである。触糸の長さと、その後の伸長は点線で切って表わしてある。

クモは、時どき上幕に出て歩きまわり、出糸突起を上幕にすり付ける様にして糸を出し、幕を厚くしたり広くしたりしているのである。この作業は不定期なものであるが、食物のかすなどを、上幕の

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

表面にとじ付けて(このクモには、住居に擬装をほどこす習性がある。)居所に帰る前に行なうことが多い。下幕にも同様の手が加えられているはずではあるが、内部のことなので直接見ることはできない。しかし、上幕をはぎ取って観察すると、下幕と触糸の様子から推察することができる。図②と③は、下幕の形と触糸の出方を示したものである。②で明らかのように、触糸は幕の中心から放射状に出されている。ところが、多くの住居について検すると、触糸は下幕の外縁から出ている様に見えるものが多い。これは、下幕に糸が加えられて広く厚くされていくために、触糸の中心部がおおいからされて見えなくなるからだと考えられる。③が、そのことを示している。

このクモは、親もとを離れ独立して居を定めると、むやみに移住することなく、また、住居や触糸のつくりかえも行なわず、上に言ったように、糸を付けたすことによって、成長段階のそれぞれの体格に応じたものに拡大し、また、補強していく習性のクモであると言える。

キノボリトタゲモの住居の戸は、クモが、その頭胸背で押し上げて外に出られる様に住居口に取りつけられている。その戸は1重の簡単なものではなく、大きさの違う同じ形のものが図④に示した様な形に何枚か重ねられたものである。何枚かのものが、ぴったりくっつけられて1枚の様に見えるが、それぞれの周縁は接着されておらず、そり返っているので、何枚重なっているかすぐわかる。本種も、ヒラタグモと同じように、成長にともなって住居を拡大していくクモであり、それが、戸の「重なり」に現われていると直観した。しかし、住居の拡大作業を直接観察することは、ヒラタグモの場合よりも困難で、私には不可能な事に思われた。せめて、今ある住居について、その証拠(拡大されたという)を見つけてみようと考え採集に出かけた。

集まつた住居41個のうち27個は、主のいない古いものであったが、とにかく、「重なり」によって分けてみると、4重のものは1、3重・または3重であったと見られるもの23、2重・または2重であったと見られるもの11、1重のもの6であった。「見られるもの」というのは、戸の表面の状態や大きさなどから見て、上に重なっていたものが離れ落ちたものと判断された住居である。採集したものの中に、上の1枚が今にも落ちそうにプラプラしていたのがあったので、私の判断は誤りではなかったと思う。また、この事は、戸の拡大が、元のものの外縁に継ぎたすのではなく、広いものを下に重ねるという手法をとっている証拠ともなる。

さて、4重のものは1個だったので除外して、戸のタテ(上下)・ヨコ(左右)の長さ(単位mm)を測った。古いものには、縁部が大きく欠けたものがあったが、それは欠けたままで測定した。結果を表に示した。

この表によると、私の採集してきた住居の戸は、およそ(タテ6.0ヨコ6.0)→(タテ7.0ヨコ8.0)→(タテ9.0ヨコ10.0)の順に拡大された、あるいは拡大されるであろうことがわかった。

除外しておいた4重のもの(図④)の最上段のは、タテ・ヨコ共に3mmで、それから下のは「3重のもの」と同じくらいのものであった。また、別に採集した幼体の住居1個は、2重の戸であったが、上段のはタテ・ヨコ共に2mmで、下段のは、表の1重のもの及び他の上段のものと同程度のもの

であった。この2つは特別なものであったかも知れないが、「拡大する」ことを認める立場からすれば、表に示した40個にも、この様に小さなものがあった。しかし、次の戸をつくる時、その中に埋もれて分らなくなつたとも考えられるし、その様な状態になるのが普通のことであるとも考えられる。

戸が拡大されたことは、とりもなおさず、住居本体も拡大されたことを示すものである。おそらく住居壁を切り開いて継ぎたすものと考えられた。ところが、継ぎたしたと見られる所がわからなかつた。表面に付けられている土砂やコケをかき落し、洗ってみても、さっぱり見ることができなかつた。だからと言って、「拡大」を否定することはできない。むしろ、継ぎたしによる拡大であり、外装と絹糸による裏打ちのために、継ぎめが分らなくなるのが当然とも考えられる。

以上は、資料を整えないままに書いたので、粗雑な文章になったが、私は、住居（広義の網）をつくるクモは、その住居を拡大・補強することによって生活をささえていると見ているし、網（狭義の網）を張るクモの中にも、たとえばオオヒメグモやジョロウグモやタナグモなどのように、糸を張りたして網を拡大していくものが案外多いと見ている。このようなクモを多く知り、その生活を究明していくければ、住居から網への変化（進化）の道順を知る手がかりを得ることができるよう思う。そのためには、多くの方がたの御指導をいただきたいし、御助力もいただきたいので、はずかしながら、文章としてみたのである。

3重のもの				2重のもの				1重のもの			
上		中		下		上		下			
タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ
5.5	6.0	8.0	9.0	13.0	10.0	8.5	7.5	10.0	9.0	7.0	5.5
7.0	6.0	10.0	7.5	11.5	8.0	7.0	5.0	7.0	7.0	6.0	4.0
5.0	4.0	7.5	7.0	10.5	9.0	7.0	5.0	9.0	8.0	9.0	7.0
9.5	9.0	11.0	12.0	7.5	12.0	4.5	5.5	5.5	7.0	5.5	5.0
5.5	7.5	6.0	8.0	6.5	8.5	5.0	6.0	6.0	7.0	6.0	5.5
4.5	6.5	5.5	7.5	7.5	9.0	5.0	6.0	6.0	7.0	7.5	7.0
6.0	8.0	9.0	11.5	10.5	11.5	?	?	8.0	8.0		
5.0	6.5	7.5	9.0	9.5	10.5	?	?	7.0	8.5	平均 6.8	5.7
?	7.5	6.5	9.0	8.5		?	?	7.0	8.5		
?	8.0	7.0	10.0	9.5		?	?	5.5	7.0		
?	5.5	8.0	8.5	10.5		?	?	5.0	7.0		
?	7.0	8.0	12.0	11.0							
?	8.5	9.0	9.0	11.0	平均 6.2	5.8	6.9	7.6			
?	6.5	8.0	9.5	11.0							
?	7.5	8.0	9.0	11.0							
?	7.5	11.5	9.0	11.5							
?	9.5	10.5	10.0	12.5							
?	9.0	11.5	9.5	10.0							
?	7.5	9.0	7.5	9.0							
?	?	?	8.5	11.5							
?	?	?	7.5	10.0							
?	?	?	11.0	10.5							
?	?	?	8.0	10.5							
平均 6.0	6.7	7.8	8.9	9.3	10.3						

# 長生きをしたクロガケジグモ

田 中 穂 横(堺市立科学教育研究所動物研究室)

## はじめに

クロガケジグモを日本で初めて発見されたのは矢野健人氏で、1963年大阪府布施市（現在の東大阪市）であり、その後1973年には、少し離れた松原市で吉村守氏が多数本種を見つけられた。しかし実際はもっと以前から生息していたようである（八木沼、1974）。また別に和歌山県の方でも、1975年に後藤岳志氏によって本種が発見され、それについては詳しい報告が最近の Atypus に載っている（1978(1), (2)）。

## 飼育を始めたきっかけ

最初に発見されてからすでに15年、多数見つかるようになってからは5年が経過したことになるが、著者が本種を飼育することになったのは、1976年の春（6月24日）のことであった。その当時、研究室（大阪府立大学農学部昆虫学教室）の同輩が本種の雌成体1頭を採集して来てくれた。採集場所は上記の松原市に隣接した堺市野尻町にある圃地のプラタナスの木の幹との事であった。この個体をプラスチックスの容器（直径7.5cm、高さ11cm）にはうり込んだのが始まりである。

## 飼育の方法

1. 水分はほとんど与えたことがない（外から見るかぎり、いつも乾燥していた）。2. 餌としては、気がむいた時に、だいたい週に1回の割で、最初の1年間ぐらいはイエバエ類の幼虫や成体を数頭、その後はチャバネゴキブリの成体を数頭与えた。3. 容器は室内に放置。以上のようにあった。こうして、この雌成体は、2年以上もの長い間をこの容器の中で生き続けることになった。

## 飼育中に観察されたいくつかの事項

容器内の網の形は、野外の場合とあまり変わらなかった（八木沼、1974、写真1—4参照）。ただロート状の穴の終りの部分が丁度容器の底になっている。

昼間はこの網の底（容器の底）でじっとしていることから推察して、また後藤（1978(1)）も報告しているとおり、本種は夜行性と考えられる。ただ昼間でも、餌を網にひっかけてやると、多分その振動によるものと思われるが、餌を取りに上ってくる。

この雌成体は容器に入れて2日後には、容器の底に接して側面に、ヒラタグモの住居のように容器に密着させて、白色円状の卵のうを1つ作った。これが容器での最初の産卵である（1976年6月26日）。その後、この雌成体は生存中に8コもの卵のうを形成し、うち6コの卵のうからは元気な子グモが孵化して来た。産卵から孵化までの日数は後藤（1978(1)）によると、15～30日とかなり幅があるようである。私の場合は6コのうち3コは約1ヶ月をようした（残念ながら残り3コは不明）。また1卵のう中の子グモの数は50頭ぐらいであったので、1回の産卵数もほぼそれくらいと考えられる。また産卵の時期は後藤（1978(1)）によると、はっきりせず1年中とも考えているようである。私の飼育では、8コのうち6コまでが5～6月の間に産卵された（6コのうち2コは孵

化しなかったもの），残りの2コは時期不明。また卵のう数を年度毎にみてみると、

年 度	卵のう数	備 考
1976年	1コ	孵化する
1977年	2コ	2コ共孵化する
1978年	5コ	うち2コは孵化せず

以上の様であった。

上記より、以外であったのは、このクモは2年以上もの長い間、精子を生かしたまま保持しているのであろうか？もしそうだとしたら、なんと効率の良いことか!!。もしこれが自然状態においても、おこっているとすれば、比較的速いスピードで分布を広げられるのではなかろうかとも考えられる。事実野外では速いスピードで分布を広げているような気もするのだが（しかし正確な分布調査を行っていないので詳しいことは言えないが）。

おわりに

以上、1雌成体の飼育を2年以上も続け、なんなくこの個体に愛着を感じ、ただ標本にしてしまったのではあまりにもかわいそうに思い、非常に雑ではあるが、ここに知り得たことを書かせていただいた。また永年、飼育されている萱嶋泉先生（アシダカグモ）や中平清先生（ハシリグモ類）は別として、本種では今のところ一番長い飼育記録（2年と4か月）ではないかと自負しているつもりです。それ以上に長い記録をお持ちの方はより詳しい報告をしていただければ幸いに思います。

最後になったが、本種の飼育のきっかけを作って下さった当時の研究室の同輩（城田安幸氏）に厚くお礼申し上げる。

#### 参考文献

- 後藤岳志（1978a）クロガケジグモの生活。Atypus, (71): 40-43。  
\_\_\_\_\_（1978b）クロガケジグモの飼育。Atypus, (72): 31-32。  
八木沼健夫（1967）日本産真正蜘蛛類の検討・追加ならびに7新種の記載。  
追手門学院研究論集,(1): 87-107。  
\_\_\_\_\_（1974）日本の真正蜘蛛類相(IV)。追大文紀,(8): 169-173。  
\_\_\_\_\_（1975）クロガケジグモはオーストラリアのクモ。Atypus, (64): 35。  
\_\_\_\_\_（1976）日本で発見されたオーストラリア区のクモ。オーストラリア  
研究紀要,(2): 170-175。

## コサラグモ 2種について

佐藤幸子

### トウキョウアカムネグモ

1977年12月28日 庭のクモの越冬の様子を見るため、植物のロゼットの下や株、又は球根の上にかぶせた枯草等を開けて見た時、トウキョウアカムネグモが非常に多くて、その上小さな網の中に必ず雄雌1つがいづついた事など何か不思議に思われましたので、容器に入れて確かめたりました。プラスチック容器（直径10cm・高さ6cm）の中に1つがいの雄雌を入れました。最初底に薄く敷いた土の上を2匹共大あわてで走りまわり落ち着かないで、ガーゼで蓋をして温度の低いところに置きました。

12月29日 容器の壁と土の間のすき間に糸を張り、2匹共に頭を寄せ合って落ち着いていました。そこで雄を取り上げ、驚いて走りまわる雌から一番離れた場所に放しました。昨日と違って雄は一度も迷わず、雌の走りまわる後を必死で追いかけ行きます。だいぶ距離が離れているのですが、雌の残してゆく糸をしっかりととらえて、その後をたどって行くものの様です。そのまま蓋をしました。

12月30日 14:00 雄と雌はてんでんばらばらのところに1匹でいます。（朝見た時は同じ網の中に2匹でいました。）だいぶ暖かいので温度に気をつける事にしました。

その後毎日朝昼夜と見ていました結果、室温7°C以下の場合は必ず同じ網の中に頭を寄せ合（直径12mm・深さ8mmの網）、10°C以上になると完全に別行動となり、住居も別になる事がわかりました。温度が下って一緒になる場合、雄がすでに張ってある雌の住居の中に落ち着く場合もあり、また前回作った住居を捨て、新らしく住居を作つてその中に2匹でいる場合もあり、まちまちでした。温度が上ると雄も雌も動きが活発で、餌ももりもり食べていました。

1978年1月6日 10:00 温度14°C 2匹の間に異状が起っていました。最初、丁の字のちょっとくずれた感じで雄が雌の腹部に取り付いていましたが、雌は雄の頭胸部を上から抱えるように脚をかけてだんだんと引き寄せ、しまいには頭胸部に咬みついた様に見えたので、もう食べられてしまうのだと思いました。そのまま2匹はジッと動かず、雌が雄の上で触肢をゆっくり上下に動かしているだけ。ルーペで見てもあまり小さくて、外雌器と雄の触肢の様子がよくわかりません。とうとう雄が8本の脚を縮めてしまい、最後には完全に死体同様になって動かず。雌は獲物をとらえた時同様雄をしっかりとくわえ、逃してなるものかという様に彼の身体をかかえ込んで離さず。というわけで、明日は雄の死体が網にかかっているのだろうとあきらめて蓋をしました。でもやっぱり気になって、3時間ばかりたってから蓋を取つてビックリ。同じところで雄雌が少し離れて元気でいるのです。あれが交接でした。後になって松本さんに、交接の場合雄は雌に自分の頭胸部のコブに咬みつかせておくのだという説明を受けて、自分の見た事に納得した次第です。最初の最初から見ていませんでしたが、一日のうち半分以上は一緒に住居で頭をつき合はせているのですから、交接の場合の接

近は抵抗なく行なわれた事と思います。

1月12日 相変わらず温度が下ると小さな住居に2匹でいますが、温度が上った場合も別居せず、雄が雌の住居を補強をしています。せまい住居ですから、右に左に動きまわると必ず雌の身体に触ります。でも雌は少しも気にせず、落ち着いて動きません。

1月17日 どんな事があっても雌のいる容器から逃げ出さなかった雄が、本日午後どこへともなく出ていきました。（交接後11日目）

4月10日 ほとんど3ヶ月というもの、待ちに待っていた産卵が本日やっと行なわれました。容器の壁に産みつけられた卵のうはビジョオニグモ型のやわらかいもので、長さ4mm・幅2mmの長丸のまゆです。（白色）その上から糸が幾重にもかけられて保護されてありました。

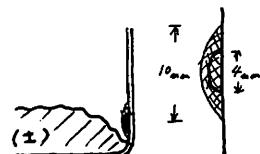
成体の体長：雌3mm・雄2.5mm 1月6日交接 4月10日産卵・卵（0.6mm）数15個

4月21日フ化（0.7mm）9匹 4月24日（3日目）第1回脱皮（0.8mm）

4月26日（2日目）第2回脱皮（0.9mm） 4月27日分散

分散した時1匹だけ管瓶に入れました。5月1日（5日目）第3回脱皮が行なわれました。（1.0mm）

トウキョウアカムネグモの卵のう



非常にやわらかな『まゆ』状の卵のうは、細い糸で保護されている。色は純白。

卵の色は淡黄色である。

・母親は1回産卵しただけで6月19日に行方不明になりました。

・綿の上に開いた卵のうをのせて観察しました。卵のうの中やまわりで第1回脱皮が行なわれました。それから綿の上を歩きまわり、中へもぐり込みます。思い思いのところで第2回脱皮を行ない、その後綿から離れて容器の隅に住居を作り出した時を分散としました。

### ヒロテゴマグモのフ化から分散まで

1977年暮 トウキョウアカムネグモの越冬の様子を見ましたが、小さな住居に必ず雄雌2匹ずついるのが不思議で観察を続けていました。交接がすんでから雄は温度の高低にかかわらず雌のいる容器から出て行きましたので、庭ではどうなっているのか（一つの住居にまだ2匹ずついるのかどうか）調べて見ました。

1978年1月17日 庭のどこを開けて見ても住居の網が見つからないばかりでなく、コサラグモは雄も雌もみんな1匹で行動しています。それで試しに雄2匹雌1匹を容器に入れました。それがヒロテゴマグモでした。

1978年1月18日 9:00 室温10°C 雪が降り寒い日です。1匹の雄は雌の住居の上2cmのところに取り付いて動かず、もう1匹の雄は反対側にシラけて中吊り。その夜シラけていた雄は行方不明になりました。

1月24日 雌は住居の補強に熱心で、まるで雄に気がありません。一緒になってから今日まで雄はしきりに雌の住居のまわりをウロウロしていましたが、とうとうあきらめたのか容器から出て行

きました。

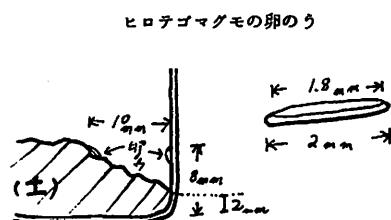
2月4日 8:00 室温3°C 住居内に産卵。直径2mmの平べったい目玉焼の様な卵のうで、2枚貝式の固いものです。きれいなピンク色でした。

1月17日に見た時、1匹行動しか見られなかったという事は、その時にはみんな大体交接が済んでいるのだという事なのでしょうか？

成体の体長 雌2.5mm 雄2.2mm 雄は6月2日行方不明になりました。

産卵日・卵数	フ化	頭数	第1回脱皮	第2回脱皮	分散
(大きさ)	(日数)	(体長mm)	(日数・体長)		
※ ①2月4日6個	4月2日(58)	2匹	—	—	—
②2月12日10個(0.3)	3月29日(46)	10匹(0.4)	4月3日(3・0.5)	4月5日(2・0.7)	4月6日
③3月4日6個(0.3)	4月5日(32)	1匹(0.5)	4月8日(3・0.7)	—	4月11日
④4月5日10個(0.3)	4月18日(13)	10匹(0.5)	4月22日(4・0.7)	—	4月23日
⑤4月13日6個(0.3)	4月20日(7)	3匹(0.5)	4月24日(4・0.7)	—	4月28日
※ ⑥4月22日11個(0.3)	5月4日(12)	11匹(0.5)	5月8日(4・0.7)	—	5月9日
⑦4月26日12個(0.4)	5月7日(11)	11匹(0.6)	5月11日(4・0.8)	—	5月13日
⑧5月6日11個(0.4)	5月17日(11)	9匹(0.7)	5月19日(2・0.8)	—	5月21日
⑨5月17日9個(0.5)	5月26日(9)	9匹(0.8)	5月28日(2・0.8)	—	5月30日
※ ⑩5月23日6個(0.5)	5月31日(7)	4匹(0.8)	6月2日(2・0.8)	—	6月4日
※ ⑪5月30日5個(0.4)	6月5日(6)	4匹(0.7)	6月8日(3・0.8)	—	6月10日

直径3cm厚さ0.5cmの綿の上に開けた卵のうをのせ、容器に入れました。開けた卵のうの中やまわりで第1回脱皮が行なわれ、その後は非常に動きが活発となり、綿の中にもぐり込みます。第2回脱皮は綿の中で行なわれます。綿の中から出て容器の隅に住居を作り始めた時を分散としました。※印の卵のうは土壤に産みつけられていました。①の卵のうは、あまりフ化しないで新海さんにあづけたものです。（湿気には非常に気をつかいました。）



糸で保護されておらず、むきだしなので、ピンク色の目玉焼といった感じである。二枚貝型で、ピンセットをつかうと椅麗に二つに開く。

卵の色はオレンジ色である。

## 北緯50度線上報告(2)

小野展嗣

現在フランクフルト発パリ行の夜行列車の寝台でこの報告を書いています。3畳分程の部屋に左右3段ずつ寝台があり、日本の国鉄の寝台車と似ていますが、唯一違うのはカーテンがないことです。そのため、いびきが部屋中にもろにこだますることもあるようですが、これは日本でも同様でしょう。不慣れな女性などはなかなか寝つかれないかも知れません。着がえはシーツが袋状になっているので、その中でゴソゴソとジグモの脱皮よろしくやればよいのですが、こちらには勇敢な女性がいるので、きっと平気な顔をして着がえるのだと思っていたら、案の定帰りの便ではうっかり寝坊した同室の若いフランス女性が、あわてて着がえてすっとんで行きました。こちらではオルゴールとともに「皆様おはようございます。まもなく○○駅に到着します」などという車内放送はないので、乗客は自分の降りるべき駅をいつも注意していかなければなりません。寝台料金は2000円程、その他個室の車輛も連結されていますが、そちらは1万円以上します。(しかし寝台車は本当に楽です。汽車で旅するのは今度で2度目ですが、前回は夜行の座席でした。)

\*

\*

\*

1977年の7月26日、マインツを午後2時頃にその列車は出発し一路北へ。ずっと座りっぱなしで、ベルギーのオーステンデに着いたのが夜の10時過ぎ。そこで連絡船の接続が悪く、駅の構内で3時間程待たされましたが、7月だというのに寒くてふるえていました。ようやく夜中の2時頃に船が出てドーバー海峡を渡り、イギリスのフォークストンに着いた頃には白々と夜が明けてきました。さらにそこから電車でロンドンまで1時間半、ロンドンで一息ついて午後の列車でようやく夕方に目的地エクセターにたどりつきました。26時間の長旅でした。飛行機だと日本から15時間程で飛んでこれるのですから、世界なんて狭いものです。さて、言い忘れましたが、この旅の目的はもちろんエクセター大学で開催される国際クモ学会議に参加することでした。以前、奄美の沖永良部へ行くのに、東京から鹿児島まで“桜島”という急行列車に丸一日夜座りっぱなし、さらに鹿児島から沖永良部島まではシケのために船底に丸一日へばりついたことを思い出しました。あのすばらしい日本最長距離急行も今では廃止されてしまったのはたいへん残念です。

さてエクセター大学に着き、申込手続を済ませ、与えられた宿舎(普段は学生寮)に荷物を置き、開会が行なわれる建物へと急ぎました。その会場わきの一室には、まさに世界から集まった人々が、開会を待っていたのでした。そのたくさんの方の顔の中に、八木沼先生、西川さん、本田さんの顔を発見したときには、長旅の疲れなどどこかにふっとんでいました。日本に居ても東京と大阪なので年に一度位しか会わない訳ですが、なぜかなつかしく感じられたのでした。その部屋ではまた、ドイツで師事しているマーテンス教授からOIDAの会長であるバーション教授(Prof. Vachon)を紹介して戴きました。氏はドイツ語を少し話されるので、フランス語のからきしな私は助かりました。たいへん陽気な70才の世界クモ学界の長に暖かい包容力とともに、学者としての圧倒的な感歎

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

を感じました。

\*

\*

\*

そして大会は始まりました。大会の概況は八木沼先生が Atypus 70号に詳しく書いておられるし、昨年のクモ学会の大会ではエクセターでのスライドの映写や報告がなされたそうなので、そこに参加された方々は大体の状況はおわかり戴けたと思いますので、ここでは大会で会うことができた世界のクモ学者のことや、講演を聴いて感じたこと等を思いつくままに記すことにします。

さて、胸をワクワクさせられたのは、今まで論文や本でしか知らなかった世界の有名なクモ学者たちが、それも主だった大物は皆顔をそろえていることです。特にフランスのボネ ( Bonnet ) ( 全世界のクモのカタログを著した ) の健在ぶりには全く驚かされました。握手したときの手のなんとも言えない柔らかさも忘れられません。もう 81 才のはずです。有名な World of Spiders や Comity of Spiders の著者プリストー ( Bristowe ) はたいへん長身のすきとおったような眼をしたおじいさんでした。ハラフシグモにたいへん興味を持っておられます。ハラフシグモとトタテグモや単性域類を一つの亜目にまとめたレーティネン ( Lehtinen ) の意見には皆批判的で、ある人などはかなりきつい調子で反対意見を述べていましたが、プリストーだけは「もちろん彼の意見には賛成できないが、しかし彼はいい男だ ( He is a very good man ) 」と相手をほめることも忘れませんでした。さすがにイギリス人だと思いました。同じイギリスのロケット ( Lock-ett ) ( あの British Spiders の著者 ) もまた長身のいつも笑顔をたやさないおじいさんです。共著者のミリッジ ( Millidge ) は本の写真で見た時はハンサムな青年でしたが、やはりおじいさんに近くなっていました。しかし、彼はコサラグモの研究を相当バリバリ今もやっているようです。ロケットの弟子にあたると思います。オランダのブレーム ( Vlijm ) はたいへん大きく威厳のある容ぼうをしていますが、とてもユーモアのある人です。今回の大会のメッセージでも何度か皆を笑わせました。オランダ人はたいてい語学に堪能していますが、彼も英独仏語でスピーチしていました。U.S.A の大クモ学者レビー ( Levi ) はとてもきさくな親しみのもてる人物です。年のわりにふけて見えましたが、物静かでいかにも学者という感じがしました。母親がドイツ生まれだそうで、ドイツ語も話されるのでいろいろ話を聞くことができました。あるとき八木沼先生と三人で話をしているとき、八木沼先生は英語で私はドイツ語で話すので、どちらかにして下さい、としかられへたな英語に切換えました。壮年組では、日本のクモにも盛んに関心を示している U.S.A のプラトニック ( Platnick ) 、イタリアのブリグノリ ( Brignoli ) 。プラトニックは小柄色白でおとなしい感じがしますが、たいへんな情熱家。ブリグノリはがっかりとした体格で、いつもはまきを口から離しません。イタリアからベンツでやってきました。6ヶ国語をマスターしたが、日本語だけは何度か挑戦してみたけれど長続きしなかった由。ポーランドのブルシンスキ ( Proscynski ) は中国へ旅行した時に、友人と二人で片方が見張りをしている間にもう片方がすばやくスヴィーピングしてハエトリグモを採集した、と面白い話を聞かせてくれました。ドイツの学者はまずかのクラウス ( Kraus ) 、いつも娘さん ( 16・7才 ? たいへん長身 ) と一緒にいました。とても説得力のある話し方をします。いつもお世話をになっているグラスホフ博士 ( Grasshoff ) は、ドイツ人にしては珍しく小柄です。

そしてマーテンス博士 (Martens) は赤ひげの美男子、30代半ばにして、Tierwelt Deutschland のメクラグモをまとめられた (近頃出版、厚さ3cm) たいへんな秀才です。発生学で有名なスウェーデンのホルム (Holm) は息子さんと、次回の大会長イタリーのトンジオルジ (Tongiorgi) は一家揃っての参加でした。その他イギリスの若手ウォンレス (Wanless) や、オランダのヘルスディンゲン (Heusdingen) など書きたい人物はつきませんがこの辺にします。私が会ったのは分類の人ばかりなので、生態方面の多くの学者たちについては何もお話できなくて残念です。最後に、イギリスクモ学会の図書を扱っているクロッカー (Crocker) 氏の本職はエンジニアだそうですが、イギリスにはクモのアマチュアが大変多くいて、どうもクモ学界はクモのアマチュアが動かしているような気さえします。とにかく和気アイアイとしているのは日本と似ています。面白いことに、日本とイギリスにはいわゆるアマチュアが多くいて、また同好会 (イギリスのクモ学界も前は同好会だった) もあります。ところがフランスとドイツには、趣味でクモの研究をしようなどという人は一人もいないのです。バーション博士も「日本ではクモを好きな小・中学生がそんなにたくさんいるのですか」と驚いていました。たいへん面白い現象と思います。

＊

＊

＊

講演は分類関係はほとんど聴きました。亜目の単位での系統論が目立ちました。皆、それぞれ自分の見識から様々な意見を公表していました。我、八木沼先生は洞窟のクモの研究における問題点を多数のスライドを使って指摘し、面目を施しました。これらの講演の要旨 (Abstracts) は一冊の本にまとめられて配られましたが、家内の分が余ったので談話会図書へ寄贈しました。興味のある方はご覧になって下さい。この大会で誰がどんな内容の講演を行なったか、およそそのところはこれを見ればわかると思います。中には講演で新種記載をやった人がいたのには驚きました。インド人もピックリーですが、何の批判も出ないところが、また国際会議のなごやかさなのかも知れません。

＊

＊

＊

さて、イギリスでの話題は尽きませんが、またの機会にしてその大会の後、八木沼先生、西川さん、新たに加わった田中穂積さんの三方が (本田さんはその後イギリスの各地をまわされました) 来独したときのことを書きましょう。皆さんの目的はもちろんフランクフルトのゼンケンベルク博物館で、日本のクモ (Bösenberg & Strand) のタイプ標本を観察することでした。さらにグラスホフ博士の御好意で他の各地の博物館からもいくらかのクモが送られてきていました。私は充分にドイツの風物を楽しんで戴こうと思っていたのですが、このタイプの観察によって日本のクモ学にもたらされることの意義は大きいので、短い滞在期間に多くを集約させる努力をしました。皆さんもお疲れにならなかったんではないかと思います。この時の様子も八木沼先生が *Atypus* 70号に書いておられるので詳細は省きます。ただ先生の記事中の私のドイツ語や英語がペラペラだというのは、実際とは違うので訂正させていただきます。そうなりたいとは思っていますが、とても2年や3年で出来るものではありません。皆さんの観察の成果はこれからどんどん発表されることと思われます。期待しています。

私自身のタイプ検討は漸進といったところです。この100年近く前にデーニッツによって日本で

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

採集されたクモを見るたびに、私は次の二つのことに対して感嘆するものです。まずひとつは、デニッツが採集して持ち帰ったクモをベーゼンベルグが研究し、その仕事の途中で死んだ彼に代ってシュトラントが完成したといいきさつを持つ大著「日本のクモ」( *Japanische Spinnen* ) のすばらしさ。デニッツの採集も、旅行のかた手間に一寸と採集したなどというなまやさしいものではなく、かなり徹底的であり、採集品の幅広さから見て彼が相当クモについての知識と愛着を持っていただろうことが容易に推測されます。彼の本業は医師だったそうですが、アマチュア・アラネオロジストとしての彼の業績に最高の敬意を表すべきでしょう。もしも彼があれだけ熱心に採集しなかったら……！ そして、その標本が最初にベーゼンベルグの手に渡ったということも日本のクモ学にとって幸運でした。あの詳細な全体図と部分図、それをよりどころとして我々は日本のクモをかなり正確に同定することが出来た訳です。もし、これがシモンやトレル（もちろん彼らも一級の学者ですが）に渡っていたら。彼らの記載はほとんど図を伴わないものゆえに、我々にはもっと煩雑な作業が強いられたであろうことは明らかです。シュトラントの他の論文を見ると、図を伴わない記載がかなりあります。あの徹底した図説の精神はやはりベーゼンベルグのものであることは、彼のもう一つの大著「ドイツのクモ」( *Die Spinnen Deutschlands* )を見れば容易に理解できます。この一冊の本は、日本のクモ学の最初の頂点であると同時に70年たった今も少しも色あせない魅力に満ちた本であると思います。

もうひとつは、その貴重な（我々にとっては）標本が、よく今日まで保存されているということです。グラスホフ氏からも良い話を聞きました。第2次大戦も末期になって、いよいよフランクフルトも敵の砲弾を浴び、博物館にも危機がせまったときに、博物館の厖大な標本や書物を他の場所に移動させるために博物館員全員に市民が多数加わって、戦火の中バケツリレーよろしくそれらの文化財を運び出したというのです。おかげでそれら一種の文化財は戦災をまぬがれ今まで立派に保存されています。こうした金錢的価値のない文化遺産（？）の保存に対する当事者の執念、そして一般人の深い理解は我々ももっと学ぶべきであろうと思います。（ただし「自然そのもの」の保存に関しては、原始的な人間程すぐれているように思います）

しかし、標本は無限に保存できるものではありません。現にヒメグモ科のものなどでは、かなり標本がとけて、構造が見えにくくなり、記載に堪えないようなものもあります。もちろん完全に退色してしまっています。おそらく200年、300年もたつと標本としての価値はなくなってしまうものと思われます。にもかかわらず記載の重要性とともに、標本の保存の重要性（たとえ200年でも）を痛感しています。個人のコレクションも持主の死後はかかるべき団体（談話会？！）に寄付され、充分に管理保存されるべきでしょう。

＊

＊

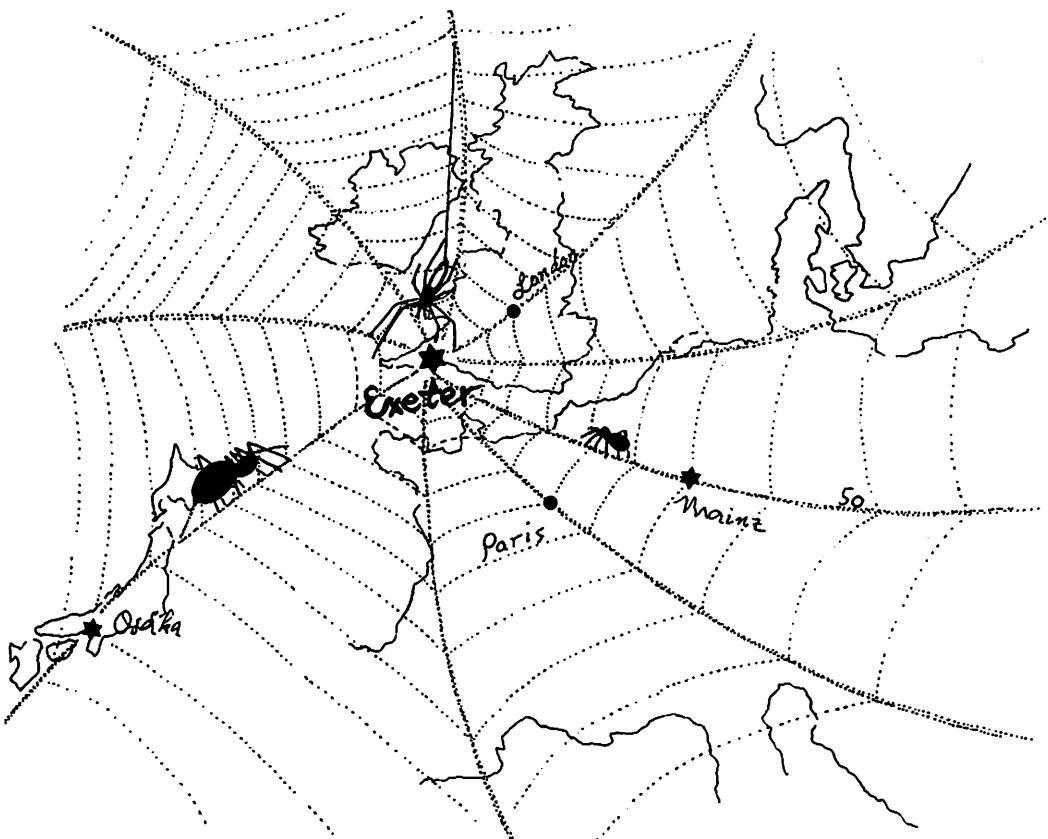
＊

パリに着きました。どこをとっても絵になる景色ばかりです。セーヌも流れています。これではアンノン族が殺到するのも無理からぬことだと思います。せっかくパリに来たので、CIDAの本部のある国立自然史博物館（訳が適當かどうかわかりません。Muséum national d' histoire naturelleです）にバーション教授を訪ねてみようと思います。エリセーター以来の再会が楽しみ

です。フランス語が全く話せないのが残念でなりません。( 1978年5月24日 )

追記、50度線から少し離れた去年の夏のこと終始してしまいました。またまた私見の羅列になりましたがお許し下さい。

CIDAはCentre International de Documentation Arachnologique の略です。ではまた。



# 研究雑記帳 (1)\*

鈴木 恵一(都立両国高等学校) \*\*

クモ類Araneida の研究者人口が今日のように増えるにつれて、本誌その他のクモ関係の研究誌に投稿する人が増加するのは当然である。それらを見るにつけて、10数年前と比較するとなんと内容に充実が出てきたものかと感激するのだが、それにもかかわらずこうした雑誌を見ていると、最近どうも心にひっかかることがある。私がAraneida の門外漢であることを充分認識した上で敢て筆を取ることを御容赦願いたい。以下に述べることは私自身の反省であり、今後私がとらなければならない姿勢でもあることを明記しておきたい。また、反論・誤りの指摘などあることを期待したい。

## (1) 報文(論文)とその内容

本誌のようなタイプオフによる印刷の雑誌は、それが現在では広く利用されていて、また活版印刷よりも軽印刷の方が主流を占めている。実際に何らの支障がなくとも、動物命名規約でnew taxa に関する記載等を行わないように勧告されていることは周知のことである。またこれも勧告であるが、新群の記載には英・独・仏・伊・ラ語で書かれるのが望ましいとしている。欧文で書かれるのが望ましいなど、まさにコーカソイドの獨善であるなどと言えなくもないが、国際的情報交換のためには日本語のような少数民族の言語ではまずいという点もわからないことはない(問題は単なる人数ではなく、いかにその分野に携わっている実動人口が多いか、また、その成果が妥当性のあるものかなどを基準すべきなのだが)。新群の記載ではめったにこれを無視したものは日本ではない(共産国ではこのような勧告があることをまったく知らないかのように自国語で発表しているものがたくさんある)。

最近特に目についたことで、*Synonymy* を扱った内容をもつ邦文の報文があった。気にして過去のその雑誌の内容をよく見てゆくと、以外にこれが多いのに驚いたのである。専門誌において果して邦文でこのようなものを掲載して良いものであろうか? そのうちの一例をあげると、海外での採集品の中で、ヒメクモ科の一種が從来所属せしめられていた属では妥当性を欠き、転属すべきであるとし、NEW SYNONYMY なる表示を与え、シノニム表を付して述べられている。新群の記載と違って単に所属の変更であるからという理由であるなら、あまりにも雑すぎないだろうか。仮にも從来慣用されていたものとまったく違う名を与えるのである。その変更理由がだれにでも理解されるような処置を取るべきではないか(誰にでもとは、国際的にと換えててもよい)。当然欧文による説明は必要となる。命名規約においてもシノニム、ホモニムについてはその扱い方について条文化されているのであるから、前述の言語に関する勧告の影響を受けてもよいと思う(いや、むしろ受けるべきである)。

---

\* Note arachnologique (1<sup>re</sup>)

\*\* Keiichi SUZUKI

いくら欧文にしたところで国内の雑誌に発表したのではその効果が少ないという説もある。しかし、欧文で出版した以上それから後のこととは関知する必要はない（内容に関しては無論別である）のではないか。発表したものが他の研究者に採用されるか否かは、業績や内容で決まるものであろう。

もう一つ気づいたことは、学名の綴りの変更である（邦文でやってしまっている！）。規約33条で綴りの変更は論証により修正されたものは認められるが、これを邦文で論証しても意味のないことである（これも前述のシノニムと同じ感覚で行ったのであろうか？）

もし、邦文でこれらのような内容の論文（報文）が投稿されたなら、これを採用するか否かは編集側の責任である。このようなものを掲載することで無用の混乱を招く恐れがあれば Judge and referee をきちんとすべきであろう。もちろん、編集側の責任以前にそのようなものを投稿する著者に問題があると思う。

## （2）和 名

親しみ易く、だれにでもすぐ憶えられ、しかもこれほど多くの問題を含んでいるものはない。研究者の少ないうちは学名のみで意志の疏通は充分なされていたのであるが、クモ人口の増加に伴って小学生、中学生なども加わってくると当然のことながら和名がよく使われだしたにちがいない。しかし、昨今の和名の使い方や命名を見ていると首をひねりたくなるようなことが多い。最も代表的具体例は、種名不詳（新種なのか、既知種かも書かれていらない）のクモについてご丁寧にも立派な和名をつけて発表しているのである。種名の確定していない動物に対してどこの世界で名を与えることがあろうや。ましてこのような状態でそのクモの和名（勝手につけた）を使って講演を行い、講演要旨を仮称（この仮称の意味も私には理解しがたい。正しい方法で和名をつけるなら、仮称などとせず新称とすべきで、仮称がそのまま慣用されるのは更におかしなことである）として和名を付すなどは厳に慎むべきことである。種名不詳なら～sp.1とか～sp.Aでまにあうはずだ。

私自身、和名などは必要のないものと考えている。前述のようにその動物に対する親しみやすさを感じるという点では母国語で名を綴った方がだれにでも憶えやすくもある。しかし、母国語の名があるから誰も彼もやりはじめるといった調子で人口が増加してよいのであろうか。極端な表現をすれば、学名ぐらい憶えられないならやるべきではない。独善的発言であることは充分承知しているが、人口増加による質の低下をくいとめるにはこれくらいのことは考えてよいのではないか。「科学（学問）の自由を奪うのか」という声が聞こえそうだが、そうでないことを汲取ってもらいたい。

また、和名はその種の分類学的所属が変わると何んら変化しないため、分類上の所属がわからなくなってしまう。歴史性をつかむことのできない和名を使い、やたら「仮称合戦」がくりひろげられるなど将来を思うとぞっとする。ここいらで和名のメリット、デメリットを考え、和名再考を行ってもらいたいものである。

## （3）幼生・亜成体

クモの後胚子発生をいくつかの時期に形態上の特徴から区切り、幼生・亜成体・成体と名づけているようであるが、同じ Arachnidea でもダニ類その他の類で使っている用語と多少相異があるので、これらの語について考えてみたい。

本来、幼生という語は昆虫学などで成体以前の未成期の動物を総称して呼んでいる幼虫 *Larvae* の一時期を表わす語である。岩波生物学辞典(1972)によれば、幼虫 *Larvae* なる語は完全変態類に限って使われており、不完全変態類については若虫 *nymphs* という語を当てているという。等翅類や総翅類では、初期の完全に無翅の幼虫を *Larvae* (つまり幼生)、後期の多少とも翅芽が外部に現われたものを若虫 *nymphs* と呼んでいる。つまり形態上でギャップのある状態をもって区別しているのであり、ダニ類においても6脚で、生殖原基もない時期を幼生、これと成体との間を若虫(ダニ類では、若虫の時期が3段階、2段階、1段階、ゼロ、8段階などに変化している)と呼んでいる。多くの他の *Arachnidea* のメンバーもその後胚子発生上の特徴から幼生、若虫、成体の語を使っている。不完全変態の型式を取る以上 *Araneida* も例外ではないのだから、亜成体などとあいまいな表現は正しくないと思える。クモについての後胚子発生の優れた研究は Vachon (1957) の *Contribution à l'étude du développement post-embryonnaire des araignées* (*Bull. Soc. zool. France*, 82(5-6); 337-354) や Emerit (1968) の *Contribution à l'étude de la biologie et du développement de l'araignée tropicale Gasteracantha versicolor* (Walck). (*Argiopidae*) (*id.*, 93(1): 49-68) を参照されたい。これらの詳しい研究を受け入れ、近縁のダニ類、昆虫類、カニムシ類、ウデムシ類その他多くの *Arachnidea* のメンバーで使用している語を用いることを今後の比較研究、情報交換のためにぜひとも提唱したい。なお、通常幼生は Lv 又は L、若虫は N<sub>1</sub> ~ N<sub>10</sub> 又は n<sub>1</sub> ~ n<sub>10</sub>、成体は Ad と記号で示すことがほとんどである。

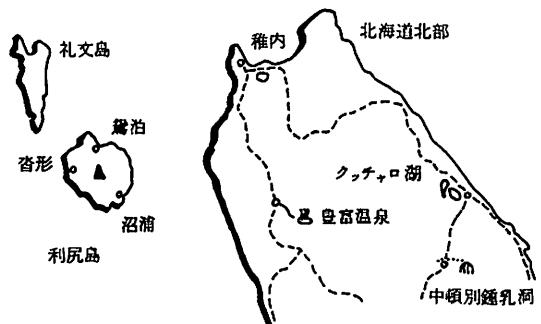
#### (4) その他雑感

昆虫、とくに蝶などで行われているような昆虫という生物を一つの商品として扱っている現況は、誠に研究者として恥しい次第である。もっともそういう人種は「研究者」ではなく、単なるコレクターにすぎないのだろうが、多くはその区別も自分自身でつけられずにコレクター的行動をしているようである。対象とする動物が美しく、珍らしければ珍らしいほどまさにコレクター的心理が頭をもたげてきても無理はないが、生物一命あるものを殺している以上それに報いるだけの結果を出さないでいることは即ち犯罪行為である。クモの中にも珍品、美しいものなどあるが、これに似た傾向がないこともないようである。これほどのことはなくとも単にコレクションするだけで、コレクターの域を出ないというようなこともなきにしもあらずである。採集した以上何らかの方法でその結果を分類学、動物地理学、系統発生学、生態学、発生学、生理学、形態学その他学問的な意義を持たせるよう努めるべきであろう。もし、分類学に興味あるなら、下記の書物が单なるコレクターから一步前進させる推進力となるであろう。読んでいただきたい。

- ①今泉吉典(1966)動物の分類・第1法規出版社
- ②井尻正二(1972)古生物学汎論(下)・筑地書館
- ③高木貞夫(1978)動物の分類・東京大学出版会
- ④徳田御稔(1970)進化系統分類学(I)(II)・共立出版
- ⑤鹿間時夫(1961)進化学・朝倉書店
- ⑥D.ラック(1976)進化・思索社

# 道 北 紀 行

熊 田 窓 一



以前より北海道にあこがれ、昨年ミズグモ調査隊の一員として初めて足を運んだが、その時は目的のミズグモに会えず帰って来た。往復共に飛行機を使ったため、はるかなる北海道に行った、という実感がなかった。やはり旅の本命は列車である。「青函連絡船に乗ってゆかなければ北海道に行った気がしない。」という人もいるくらいである。休みがとれたのを機に前回は道東を回ったので、今回は道北に行くことにした。

上野から本州のはずれ青森まで約10時間の夜行列車を楽しみ、津軽海峡に浮べば木辺にも似た連絡船にもぐり込み、アサリのみそ汁に舌つづみを打って約4時間、北海道の玄関函館に着く。着いた日が日曜日とあって相当の人出である。さてここから道央札幌まで6時間、昔は蒸気機関車が引いていたニセコに乘る。大沼公園に入る手前より駒ヶ岳が青空にくっきりと見えてくる。長万部では名物カニメシ弁当をほうばる。青函のミソ汁と共に以前北海道に行った人のおすすめ品であるが、札幌のミソラーメンは食べそこなった。札幌から再び列車に乗る。急行利尻は10時間ほどでようやく夜の明けた稚内に到着。9月23日の夜行で上野をたって足かけ3日、飛行機ならばわずか3時間である。

この旅行の少し前に長野の千国安之輔氏より「北海道に行って来た。」という連絡をいただき、千国氏のお宅に遊びに行つた。千国氏は利尻・礼文から道北にかけて奥様と2人で採集旅行をされ、昨年道東を回ったミズグモ隊調査隊が摩周湖畔で3頭の幼体を見つけて大喜びしたニワオニグモが、利尻・礼文から道北一帯に広く、そしてかなり多くいることを確認してこられた。

千国氏が訪れてから半月して同じ利尻に渡るのに少なからず抵抗はあったものの、やはりあこがれの北海道、そして道北に来ての利尻は足を運ばせるのに十分魅力があった。

利尻へ向う第二宗谷丸の中で隣りに座った島の人に対するすめられ、朝から酒をこちそうになりながら、「クモを探りに来た。」と話をしたら、「この島では子供がクモで遊ぶ。」と教えてくれた。方法としては鹿児島のものと同じようだが、競わせるクモは黒いクモ・赤いクモ・ダイダイ色のクモが主であると言う。黒いクモはオニグモ、赤いクモはアカオニグモ、ダイダイ色のクモはアカオニグモの幼体、まさかニワオニグモではないだろうと思う。これは島で実際に子供が遊んでいる所を見なかつたし、聞くこともなかつたのでそれ以上の詳しいことは分らずじまいである。クモは多いらしく、皆が「クモはいっぱいいる。」と教えてくれた。

利尻の第一歩は鷲泊(オシドマリ)から初まる。フェリーの中での島の人、沓形の川端さんに泊り

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

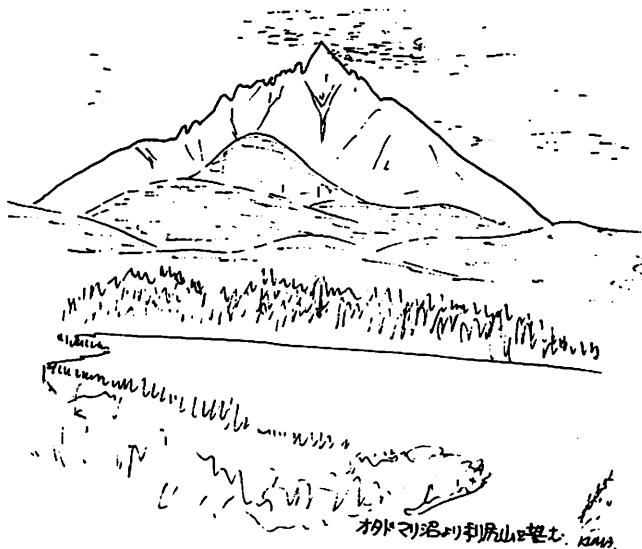
に来るようさそわれたのでその親切に甘えることにして、立並ぶ客引きを後にポン山に登るべく道を探す。鷲泊～ポン山～姫沼と回るのが一般的なハイキングコースらしく、ポン山までは利尻富士とも呼ばれる利尻山への登山道を歩む。しかし少し行った所に利尻山神社があり、道をそれで参道に入つて両側のカラマツやササをスイープするが、エゾアシナガグモやカラフトオニグモが入ってくるだけであった。境内に荷物を置いて採集を始めるが、ここはカラスが多く、ちょっと目を離すと荷物の回りに集まり、落ちつけない所だ。このカラマツで直径30cm位の円網を張り、その一端に潜んでいたニワオニグモを見つける。千国氏の話には聞いていたが、実際に自分で見て探って大感激。このほか同じようにカラマツで2頭、アザミの株の間に1頭、建物にて3頭を確認した。建物のものは3頭とも円網の中心に出て来ている。オニグモも多い。最近になり、姫沼は中止にして沓形方面へ行くバスに乗る。鷲泊の町はずれあたりからずっと山麓まで広大な笹原が続く。沓形までひろがるこの笹原は、今から10余年前に山火事が出て10数日燃え、とうとう森林が大きく焼失してしまったとのことである。バスを種富町で降り少し山側へ入る。工場が段丘の際にあり、その道路を進むと、道端のヨモギのような草やエノコログサのような草の間に円網が見られる。やはりニワオニグモで、想像以上にこのクモが多く、船の中で聞いたケンカグモのダイダイ色のクモはやはりこのクモだと納得する。アカオニグモはそれほど多くないが、背中に少し薄い部分を残すものの、みごとに赤くなっている。一番多いクモはナカムラオニグモで、葉や穂先を巻いた住居に潜んでいる。少し色が濃いようで、千国氏は少々疑問に思われたようだが、齊藤三郎氏の図鑑ソックリである。利尻は終日風が強く、カメラを構えてもシャッターが切れず閉口した。草ヤブの中のスイープではアカスジコマチグモやハナグモが入る。根元をかきわけて *Xysticus* の一種やウラシマグモの幼体を探る。疎林の中の円網はオニグモで、灌木の枝先や低木の葉先にはアシクトヒメグモが多い。疎林を過ぎると所々に木が生えているだけで、あとは一面ササが覆っている。笹の根元にサラグモがシート網を張っているが、成体になっている個体は見つけることが出来ない。草むらのスイープでナカムラオニグモ・ハナグモ・シロスジショウジョウグモが入る。コモリグモも足もとを走るが、ほとんど幼体である。道路の上を薄茶色の大きなクモが歩いているのでひろい上げたところ、ツノオニグモの雄であった。道が折れ海岸線と平行になり、左手に雲にかくれた利尻山の山麓をながめ、右手にカラマツ等の林の上に日本海を見て、ゆるくうねった笹原の一本道を進む。笹原の中にはマダニがいっぱいいるようで、入るのは遠慮する。沓形の町へ下りる道沿いでもナカムラオニグモ・ニワオニグモが多く、カラマツの幼木にはヤミイロオニグモが円網を張っていた。

沓形の海岸に打ち寄せる波は静かだが、沖では波頭が白く飛んでいるのがよく見える。海岸に駆けつめられた石の間にキハダガケシグモのボロ網がいくらでも見つかる。ヤマトガケシグモと同じ網で、網を震わせると石のくぼみなどからヤマトガケシグモの黒色型を思わせるクモが出てきた。「いつになく今年は暖かい。」と言う乾したコンブを取り入れに来たおばさんの話を聞きながら夕陽をながめ、今日やっかいになる川端さんの所に向う。利尻山はすっかり雲の中に入っている。ほかがすっかり晴れわたっているのに、どうしてそこだけ雲があるのか不思議な感じがした。

沓形の川端さんの所にすっかりおせわになってしまう。旅先での親切は本当にうれしいものだ。利

尻にはクマもないし、野山に分け入る者にとってまことに良い所だが、カマイタチが出るから気をつけるよう自らの傷を示し「強い風が吹く海上に1700mもの山が出ているので、風のぐあいで起きるらしい。」と教えてくれた。クモについては誰かが「以前どこかの先生が利尻山の頂上付近で採った蝶とクモが日本で非常に珍らしいものだった。」と話をしていた、と教えてくれたが、はたしてこのクモが何であるか分らない。

翌日は雨。今年は雨に好かれる年のようなが、ここまで来てスゴスゴ帰るには忍びず、島を一周する路線バスに乗る。シケで船の出ない時はまた来い。と川端さんに言われ、うれしいやら心細いやら。沓形から沼浦までの海岸沿いの道路はほとんど舗装されておりバスも立派で、しばらく一人きりだったので広い景色を独占したようだった。沼浦も雨。しかし5分ほど歩くと沖の方から背空が雲を押してきて、さほどの風もないのに雲がその端をカッターで切ったように一直線にすごい勢いで去っていった。前線の通過である。残った空には雲一つない背空と晩夏を思わせる太陽があり、利尻山の雲も今は勢いもなく、しだいに山頂へと上っていくようだ。オタドマリ沼についた時には強い日差しが雨に濡れた木を笹を山をくっきりと、そして近くに浮き出させていた。オタドマリ沼は島一番の沼で、水深1m位、赤茶色の水で満ちている静かな所である。沼を回る道は村民以外の立入禁止になっているが、見て見ぬふりをして入ってゆく。周辺の森で良いキノコが取れるためらしい。笹の中の道をスクープしたが、ただ網がねれるだけ。



沼の中は水草など全く見当らず、ミズクモは期待できない。葉を巻いてナカムラオニグモが多く、林ではハンモックサラグモ・フタスジサラグモ・キザハシオニグモが網を張っており、シフティングではエゾアシナガグモやフクログモ・エビグモの一種の幼体が落ちてくる。キク科の花が集まった中にハナグモ・キンイロエビグモに似たエビグモの幼体が潜んでいる。一周する間に利尻山の雲もだいぶとれ、山頂に立つ峰々が顔を出し万年雪も望むことができた。

沼浦より再びバスに乗り鴛泊へ向う。沖に北海道本島が見えてくる。天気が良くなり、フェリーが欠航になる心配がないので、鴛泊に宿をとって昨日行きそこねたポン山へ再び向う。車道が終って山道になったあたりで、せっかく持っていたながら笹原ばかりで落葉のある良い場所が見つからず、下げているだけだったフルイを使うことにして店をひろげ、道の両側にある躄にたまつた枯葉の層をフルイはじめた。しかし振ってみると予想以上にクモが出てくる。コモリグモは全て幼体だが一番多く、

シボグモモドキも多い。大望の小さなサラグモもいくつか採れ、これは後日の検鏡でチョビヒゲヌカグモ・オニノカナボウケズネグモ・マルサラグモなどとわかった。カニムシもいくつかとれる。少し笹原の下も試みたが、根が張っていて思うように土壤がとれない。しかしシボグモモドキはいくらでも走り回っている。予想以上といっても一回の成果は少ないので2時間ほど道の真中に寝そべって吸虫管を口にくわえていたが、キノコ採りの人が下りてくるとビックリするらしく、しばらく様子を見ていて、「何をとっているのですか。」と声をかけてきた。「クモですよ。」と言ふと、「クモですか。変ったものしますね。」といいつつ足早に離れていく。眼下には駿泊の町とどこまでも青い海と空が続いている。太陽が赤味を帯びはじめた頃、海に向って歩きだす。とうとうポン山～姫沼は行きそびれてしまった。振り返ると雲一つない利尻山が夕日にそまって、峰の一つ一つが、山肌の感じが変りゆく光の中で手にとるようによくわかる。夕日が礼文の上に浮ぶヒツジ雲の中に沈んだ頂より一層風が強くなり、夜半には雨が降り出してきた。窓ガラスに当る雨音が北国のきびしさを感じさせる。

よく晴れはしたもの、風は相変わらず強い。稚内行の1便に乗るため少々早目に港に行き、そばのペシ岬に登る。93mの高さを持つ岬からは利尻山・ポン山・礼文島・北海道本島とぐるり見渡すことができた。海の上にはこの島に向ってくるフェリーが白い波をけたてている。樺太は見えなかつたが、利尻山に登ると手をのばせば届きそうな所に見えるそうです。岬から下りる途中イタチが道を横切った。船は30分ほど遅れて出航し、来る時以上にゆれて30分ほどよけいにかかると稚内に着く。やはり地面に足がついていないと落ちつかない。ここから次の目的地、日本最北の温泉豊富（とよとみ）温泉へ向った。

豊富温泉は豊富駅からバスで15分、牧場のはずれにボツリとある。「温泉以外何んにもないんですよ。」という宿の人の話どおり、牧場の中に温泉が出来てしまった、という感じがする。もともと油田を探しての試掘中に出土したもので、成分などは見てこなかったが、褐色ににごり湯の花が浮いて塩っかい。冷泉なので大型ボイラーで沸かしている。ここは利尻とは変り、丘陵的な山が続いて木も多い。紅葉にはいま一つ早く、やっと色があせて来たというところだ。緑が多く感じられるのは、ここでも笹が大きな顔をして広がっているためだろう。山の麓を歩いたが、網を張っているクモは見られず、相も変わぬ笹原のスイープも收穫なし。町はずれのお稻荷さんに入り、その裏でフルイをして小さなクモを採集、これらはチョビヒゲヌカグモ・キタヤミサラグモ・ハイイロヒメグモ・ナガイズツグモなどであった。フルイをしている足もとを大きなクモが走り、取り上げるとコモリグモの成体で、これはアライトコモリグモであった。天気が良くなつたためか夜になるとグングン気温が下り、用意してあるストーブに火を入れて暖をとる。北海道にきて初めて夜の空が泣かないので、宿の近くの神社に夜間採集に出た。燈籠や木の間にたくさんある円網はオニグモで、枝にはハンモックサラグモの網が見られ、エゾアシナガグモも多い。燈籠ではオオヒメグモ・コケヒメグモが網を張り、シモフリミジングモが笹の下のくぼみに入っていた。木の幹でキタエビグモを探るが、これ



以外の徘徊性のクモは全く見あたらない。キンヨウグモが地面から30cmぐらいの葉裏にぶら下っている。神社のそばに川が流れていて、キタドヨウグモが建物・植込み・木などにたくさん斜円網を張っており、ここにはオニグモの円網は見られない。イチイの実が懷中電灯の光の中で赤く浮き出て印象的である。まだ7時を回ったばかりなのに誰一人歩いておらず、森閑としている。寒さに負けて温泉に飛び込み、酒を飲んで内外から体を暖めてフトンにもぐり込んだ。利尻から船に乗ったためか本州に眠る気がする。

朝、駅に行くバスを待つ20分ほどの間を牧場の隅で草をかきわけてすこし、牧草の間や積んだ枯草の間にいるクモを探る。これらはキタセンショウグモ・トガリアカムネグモ・テナガグモ・ヤマジサラグモなどで、この中に日本新記録のクモが入っており、このクモにサロベツコサラグモと和名を与えた。牧場などは同じ草が生えているだけで、あまりおもしろそうでもなかったが、以外とクモが豊富で、今までただの草原に見えていたのに、このあとはクモがいっぱい手を振っているようで、楽しみがまた増したようである。

今日の目的地は日本最北の鍾乳洞、中頓別鍾乳洞である。中頓別までは車なら東へまっすぐ行けばよいのだが、列車では一度稚内に出なければならず少々不便。海上に浮かぶ利尻島が宗谷本線から由一全貌を見せる場所で今一度利尻に別れをつけ、天北線に乗り換えてオホーツク側へと入ってゆく。湿原の中のあちこちに水面が広がり、ミズグモがいるようで気になる。右手にクッチャロ湖が見えてくる。大きくて、まるで入江のようにかなたまで続いている。ここには野鳥観察センターがあり、鳥の人にはおなじみのところのようである。中頓別の駅にある案内板には中頓別鍾乳洞、当駅より徒歩1時間10分。全く予備知識なしで、どうせ駅から近いだろうとかをくくって来たものだからビックリ。ちょっとのぞいて浜頓別に行ってクッチャロ湖の近くに泊ろう、と思っていたのがもろくも破れてしまった。駅前の旅館に入つて荷物を置き、聞いてみると3kmぐらいと教えられたので、40分ぐらいだと歩き出した。ここも町から一歩出ると牧場が広がる。なだらかに続く丘をもくもくと歩くが、40分を過ぎてもその気配もない。サイロのある庭で仕事をしている人に「もう少し行くと坂があって、坂を下りたところに木の道標がありますからすぐにわかりますよ。」と教えられたが、この「もう少し」とか「すぐですよ」がくせなので、1時間ぐらい歩くところなどこの表現に含まれてしまうようである。だいたいが車を使つてるので、てくてく歩くななど論外なのかも知れない。駅から入口まで5分。そこから道を折れてなお10分奥に入ってやっと鍾乳洞の前庭に着く。やっと着いた、という気がしてホッとするが、人家から20分ほど離れているうえ、午後3時となり陽も傾きはじめ、だいにクマのことが頭に浮んできて、やはり1人で来るのはなかったと反省しつつ軍艦岩を乗り越えて洞に向う。ここにはいくつか洞があるようだが、その中で第1・3・4洞が入洞可能で案内板が完備している。一番大きな第1洞は中で左右に大きく翼を広げたような形をしているが、奥まで足が進まず、わずか洞口近くでサンロウドヨウグモの幼体を探り、早々次の第3洞へ向う。途中にドリーネが2つある。みごとに円すいにくぼんでおり、いくらでも水がすい込まれそうだ。第3洞は大岩の下の土が流出したようなもので、すぐに第4洞へ進む。一番奥の大岩のはざまのつき当りに小さな洞口があり、まるでクマの巣穴のようだが、中をのぞくとサンロウドヨウグモが網を張って

KISHIDAIA No.44, 1979, Mar

いた。天井が低いので腰をかがめて入ってゆくと、これほど多くいるものかと驚くほどサンロウドヨウクモがあり、雌雄成体から小さな幼体までのいろいろな大きさが見られる。岩かけには純白の卵のうがぶら下っている。卵のうをすかして見るとフ化しているようで、中が黒くなっていた。少し奥に進んではかのクモをさがすが、サンロウドヨウクモばかりでホラヒメクモやマシラグモなど全く姿を見ることが出来ない。

採集中は気にならなくなっていたが、さあ帰ろうと外へ出たとたんクマがどこかで見ているよう、ついつい足が早くくなってしまう。前庭まで戻ると広場に車が来ており、ほかに人が居るとわかつて非常にホッとした。広場の上にある無人と思っていた案内所にも人がおり、この人はここに朝から夕方までいるとのことで、最初に寄っておけばもう少しましな採集ができただろうにと反省する。迎えの車が来るから一緒に乗って行こうというので、再びの入洞は中止にして休ませてもらう。話を聞くとやはりクマはまれにではあるが出るそうだ。「この洞は個人所有のもので、海底に積った貝層を持ち上って出来た珍らしいものだ。」と話してくれ、車が来るまでのしばらくの間のんびりする。車で町まで10分ほど、旅館の前まで送ってもらってしまう。利尻といい、ここといい親切が身にしみる。夜はなんとまた雨。クモ採り旅最後の夜は、雨の音を快よく聞きながら、明日一日、もう一つの趣味である鉄道乗り回わしを楽しみに時刻表をめくる。

浜頓別から北見枝幸までの興浜北線はオホーツクの海岸沿いを走っており、強い風が海面に波も立たせない。線路にカラスやトビがたくさん休んでいる。日本一の赤字線美幸線は15kmもの間山を縋って駅もない。全てディーゼルカーである。ガリガリと回るエンジンと排気ガスのニオイが旅をしている実感を与えてくれる。このあと深名線を回り、列車に堪能して帰路につく。リュックの中のクモ達とぶら下してきたフルイの成果に期待通りのものがあり、ひそかにほくそ笑みながら札幌からの寝台車にもぐり込んだ。



# 北海道北部のクモ

態 田 憲 一

1978年9月25日から28日までの4日間、道北各地（利尻島、豊富、中頓別）においてクモを採集する機会を得、多少ながら成果を上げることができたので、ここに報告する。

北海道のクモについての報文はあまり多くなく、道内各地のクモ71種をまとめた八木沼健夫（1957）の北海道の蜘蛛以降、秋山隆史（1960・1961）天売島・焼尻島・利尻島・礼文島・海馬島のクモ、新海栄一・竹野光春（1965）北海道のクモ、八木沼・大野正男（1967）沿岸島嶼のクモ、八木沼・西川喜朗（1971）及び八木沼（1971）の大雪山のクモ、八木沼（1972）日高山脈のクモがある。いずれも地域別や採集種の報告であり、道内全体のものは出されていない。しかし、この点については八木沼（1977）の日本産真正蜘蛛類目録の中の分布にHkと印されているものをピックアップしてゆけば北海道の現在のリストが出来上がる。この目録が発表された時点では265種が記録されている。島部においては上記文献の中でも大野・八木沼の沿岸島嶼のクモが過去のものをまとめて一番新しいようである。

今回採集された種類としてはさほど多くないものの、いくつかの興味ある種が得られているので、それらについても若干報告する。

本報文を記するにあたり、北海道行きに御助言下され、また貴重な資料をいただいた千国安之輔氏に、不明種の同定・指導にお世話になった新海栄一氏に厚く御礼申し上げる。

宗谷支庁利尻郡東利尻町・鴛泊（利尻島）

1978年9月25・26日

1. <i>Callobius claustrarius</i> (Hahn)	キハダガケシグモ
2. <i>Pholcus opilionoides</i> (Schrank)	タイリクユウレイグモ
3. <i>Achaearanea tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ
4. <i>Anelosimus crassipes</i> (Böss et Str.)	アシブトヒメグモ
5. <i>Dipoena punctisparsa</i> Yaginuma	シモフリミジングモ
6. <i>Episinus kitazawai</i> Yaginuma	シモフリヒシガタクモ
7. <i>Stenmops nipponicus</i> Yaginuma	スネグロオチバヒメグモ
8. <i>Theridion nigrolimbatum</i> Yaginuma	タカネヒメグモ
9. <i>Arcuphanter septentrionalis</i> (Oli)	キタヤミサラグモ
10. <i>Centromerus sylvaticus</i> (Blackwall)	マルサラグモ
11. <i>Linyphia clathrata</i> Sundevall	コウシサラグモ
12. <i>Gonatium rubens</i> (Blackwall)	オニノカナボウケズネグモ
13. <i>Wideria antica</i> (Wider)	チヨビヒゲヌカグモ
14. <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

15. <i>Araneus diadematus</i> Clerck	ニワオニグモ
16. <i>A. cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ
17. <i>A. abscissus</i> (Karsch)	キザハシオニグモ
18. <i>A. cucurbitinus</i> Clerck	ハナオニグモ
19. <i>Hypsosinga sanguinea</i> (C. Koch)	シロスジショウジョウグモ
20. <i>Pronous minutus</i> (Saito)	コオニグモモドキ
21. <i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ
22. <i>Tetragnatha yesoensis</i> Saito	エゾアシナガグモ
23. <i>Pardosa lugubris</i> (Walck.)	エゾコモリグモ
24. <i>Misumenops japonicus</i> (Bös. et Str.)	コハナグモ
25. <i>M. tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
26. <i>Tibellus oblongus</i> (Walck.)	スジシヤコグモ
27. <i>Clubiona jucunda</i> (Karsch)	ヤハズフクログモ
28. <i>Itatsina praticola</i> (Bös. et Str.)	イタチグモ
29. <i>Micrommata roseum</i> (Clerck)	ツユグモ
30. <i>Zora spinimana</i> (Sundevall)	シボグモモドキ

宗谷支庁利尻郡利尻町・種富町～沓形(利尻島) 1978年9月25日

1. <i>Callobius claustrarius</i> (Hahn)	キハダガケジグモ
2. <i>Uloborus sybotides</i> Bös. et Str.	カタハリウズグモ
3. <i>Anelosimus crassipes</i> (Bös. et Str.)	アシブトヒメグモ
4. <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
5. <i>A. diadematus</i> Clerck	ニワオニグモ
6. <i>A. pinguis</i> (Karsch)	アカオニグモ
7. <i>A. cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ
8. <i>A. abscissus</i> (Karsch)	キザハシオニグモ
9. <i>A. tsuno</i> Yaginuma	ツノオニグモ
10. <i>A. cucurbitinus</i> Clerck	ハナオニグモ
11. <i>A. fuscocoloratus</i> Bös. et Str.	ヤミイロオニグモ
12. <i>Hypsosinga sanguinea</i> (C. Koch)	シロスジショウジョウグモ
13. <i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ
14. <i>Cyclosa argenteoalba</i> Bös. et Str.	ギンメツキゴミグモ
15. <i>Pardosa laura</i> Karsch	ハリゲコモリグモ
16. <i>Chiracanthium erraticum</i> (Walck.)	アカスジコマチグモ

利尻郡東利尻町沼浦・オタドマリ沼周辺(利尻島) 1978年9月26日

1. *Anelosimus crassipes* (Bös. et Str.) アシプトヒメグモ
2. *Neolinypbia angulifera* (Schenkel) ハンモックサラグモ
3. *Prolinypbia limbatinella* (Bös. et Str.) フタスジサラグモ
4. *Araneus cornutus* Clerck ナカムラオニグモ
5. *A. abscissus* (Karsch) キサハシオニグモ
6. *A. cucurbitinus* Clerck ハナオニグモ
7. *Tetragnatha yesoensis* Saito エゾアシナガグモ
8. *Misumenops japonicus* (Bös. et Str.) コハナグモ
9. *M. tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ

宗谷支庁天塩郡豊富町・豊富温泉

1978年9月27日

1. *Achaearanea tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ
2. *Dipoena punctisparsa* Yaginuma シモフリミジングモ
3. *Theridion pinastri* L. Koch ムネグロヒメグモ
4. *T. sterninotatum* Bös. et Str. ムナボシヒメグモ
5. *T. subadultum* Bös. et Str. コケヒメグモ
6. *T. subpallens* Bös. et Str. ハイイロヒメグモ
7. *Arcuphantes septentrionalis* (Oi) キタヤミサラグモ
8. *Bathyphantes orientis* Oi テナガグモ
9. *Centromerus sylvaticus* (Blackwall) マルサラグモ
10. *Linyphia montana* (Clerck) ヤマジサラグモ
11. *Neolinypbia angulifera* (Schenkel) ハンモックサラグモ
12. *Prolinypbia limbatinella* (Bös. et Str.) フタスジサラグモ
13. *Oedothorax erigonoides* Oi トガリアカムネグモ
14. *O. osakaensis* Oi オオサカアカネグモ
15. *Scotargus inerrans* (O.P.-Cambridge) サロベツコサラグモ(新称)
16. *Wideria antica* (Wider) チョビヒゲヌカグモ
17. *Ero furcata* (Villers) キタセンショウグモ
18. *Araneus ventricosus* (L. Koch) オニグモ
19. *A. cornutus* Clerck ナカムラオニグモ
20. *A. cucurbitinus* Clerck ハナオニグモ
21. *A. fuscocoloratus* Bös. et Str. ヤミイロオニグモ
22. *Yaginumia sia* (Strand) ズグロオニグモ
23. *Zilla sachalinensis* (Saito) カラフトオニグモ

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

24. <i>Cyclosa argenteoalba</i> Bös. es Str.	ギンメッキゴミグモ
25. <i>Meta segmentata</i> (Clerck)	キタドヨウグモ
26. <i>Menosira ornata</i> Chikuni	キンヨウグモ
27. <i>Tetragnatha yesoensis</i> Saito	エゾアシナガグモ
28. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
29. <i>Philodromus rufus</i> Walck.	キタエビグモ
30. <i>Trochosa ruricola</i> (De Geer)	アライトコモリグモ
31. <i>Anypshaena ayshides</i> Yaginuma	ナガイズツグモ

宗谷支庁枝幸郡中頓別町・中頓別鍾乳洞

1978年9月28日

*Meta menardi* (Latreille)

サンロウドヨウグモ

*M. segmentata* (Clerck)

キタドヨウグモ

参考のために、千国安之輔氏にいただいたデーターを記しておく。

1978年9月7日 利尻島、鴛泊・ポン山・姫沼。

ニワオニグモ多数、アカオニグモ多数、ナカムラオニグモ多数、ニシキオニグモ2頭。

1978年9月8日 利尻島、沓形一山麓。

ニワオニグモ、キンヨウグモ。

1978年9月9日 礼文島、香深・元地。

ニワオニグモ多数、雄も3頭とれる。

1978年9月10日 クッチャロ湖(雨)

ニワオニグモは僅かしかいない(北海道本島は少ない)。アカオニグモ多数、ナカムラオニグモ多数。

### 興味ある種

キハダガケシグモ

利尻島鴛泊と沓形の海岸で確認。海岸に敷きつめられた石の間にヤマトガケシグモ同様の棚状不規則網(ボロ網)を作り、石のすき間やくぼみの奥に潜んでいる。草の葉を使って網を振るわせると虫がかかったと思って出てくる。得られたものは雄の亜成体で、出て来た姿はヤマトガケシグモによく似ていた。利尻島の海岸はほとんどが磯浜や石できており、島周囲に広く分布していると思われる。

シモフリヒシガタグモ

本州東北地方で記録されていたが、今回利尻島でのシフティングでカラマツの幼木から得られた。

マルサラグモ

北海道からはエゾマルサラグモのみが知られていたが、鴛泊・豊富で行なったフルイによって多数の雌雄が得られた。

### サロベツコサラグモ(新称)

牧場の草の間、枯れ草の下から雌のみ3頭が得られた。草をかきわけたためにどのような網であるかは不明。新海栄一氏に同定を依頼し、日本新記録のクモであることが判明したため上記和名を与えた。

### ニワオニグモ

1977年夏、北海道摩周湖畔と本州北アルプス常念岳で採集され、日本にも分布していることが明らかになった種だが、千国安之輔氏により利尻島・礼文島・道北から多数採集された。千国氏が訪れた9月上旬には雌雄共に見られたことであるが、9月下旬ではすでに雄を見つけることは出来なかった。カラマツの枝の間や草の間、建物などに直径30cmほどの円網を張り、網の中心から呼び糸を引いた隅に潜んでいたり、中心に占座していた。体色は黄色がかったものから橙色がかった色の濃いものまであった。採集してきた個体を田中理恵氏が飼育した結果、黄色い卵のうを作った。これについてはいずれ田中氏より発表されると思われる。利尻島以外では見つけることが出来なかつたが、個体数も多く、千国氏の言わされたように道北一帯に広く分布しているようだ。

### サンロウドヨウグモ

中頓別鍾乳洞第四洞に非常に多く見られ、雌雄成体から小さな幼体までがところせましと円網を張っており、岩かげには純白の卵のうが2つづり下げてあった。

### シボグモモドキ

笛原の地面を多く徘徊している。北方系種で、本州では高地へ行かないと見ることが出来ないが、北海道では平地にも普通に見られる。

今回の採集で利尻島において39種、豊富温泉31種、中頓別鍾乳洞2種を得たので、ここに発表した。利尻島のクモは八木沼・大野による北海道沿岸島嶼の真正蜘蛛類の中に、斎藤三郎(1933)、秋山隆史(1961)と新たに記録したものをまとめて48種を報告しているが、今回はそれらに含まれていない種が23種得られ、その結果71種が知られるようになった。北海道全体で見るとシモフリヒシガタグモ・マルサラグモ・ヤマジサラグモ・トガリアカムネグモ・サロベツコサラグモが新記録種として上げられ、そのうちサロベツコサラグモが新たに日本のFaunaに入った。

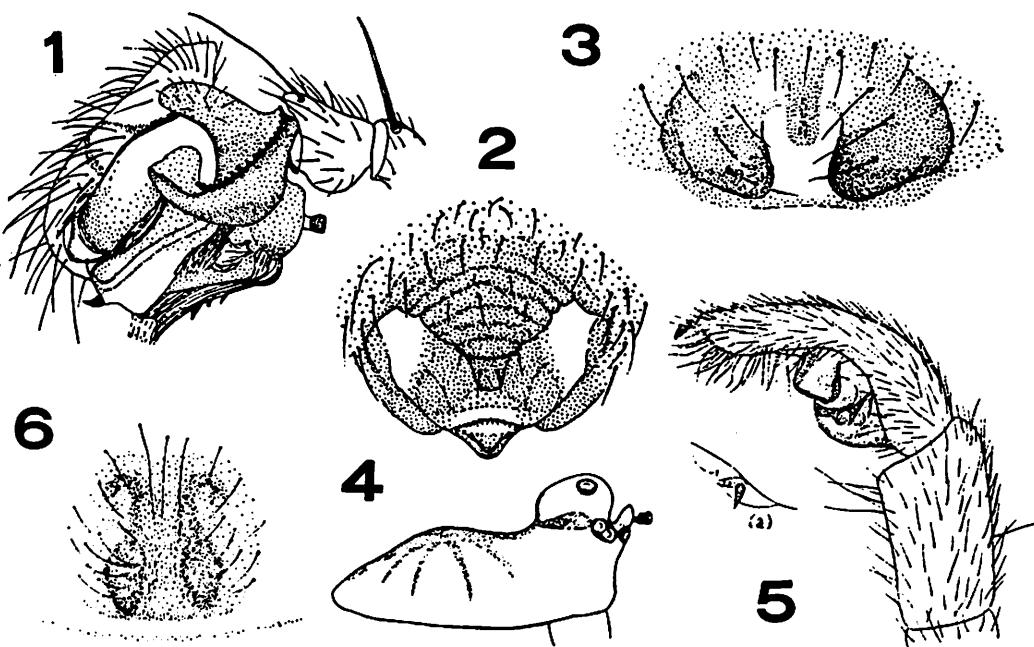
北海道に関する報告は前に述べたように少なく、クモではまだ未だ未知の地域であると言えよう。しかし、9月上旬に同地を訪れた千国氏はシフィティングを主とする採集をされているので、その記録の全てが発表されれば一層充実したものになると思われ、そのほか北海道で採集を行なっている松本誠治・新海栄一・高野伸二・古浜隆・佐藤幸子各氏の発表も待たれる。

### 参考文献

秋山隆史(1961) 北海道利尻・礼文・海馬島の蜘蛛類. *Atypus*, 23~24: 72-82  
Locket, G.H. & A.F. Millidge (1951) *British Spiders. I*, London,  
*Ray Society.*

- . — ( 1953 ) British Spiders, II, London, Ray Society,  
 Oi, R., ( 1960 ) Linyphiid Spiders of Japan. J. Inst. Polytech  
 Osaka City Univ., (D), 2 : 137-244, pls. 1-26  
 — ( 1964 ) A supplementary note on linyphiid Spiders of  
 Japan. J. Biol. Osaka City Univ., 15 : 23-30, pls. 1-3  
 八木沼健夫 ( 1957 ) 北海道の蜘蛛. *Acta arachnol.*, 14 ( 2 ) : 51-61  
 — ( 1972a ) 北海道日高山脈の蜘蛛, 国立科博専報, ( 5 ) : 17-32  
 — ( 1972b ) 日本産オニグモ属数種の検討. *Acta arachnol.*, 24 ( 2 ) :  
 51-59  
 — ( 1977 ) 日本産真正蜘蛛類目録. *Acta arachnol.*, 27 ( special  
 number ) : 367-406

八木沼健夫・大野正男 ( 1967 ) 北海道沿岸島嶼の真正蜘蛛類. 東洋大紀要, 教養(自然)  
 ( 8 ) : 13-29



1 *Centromerus sylvaticus* (Blakwall) ♂触肢. 2. 同外雌肢. 3. *Scotargus inerrans* (O.P.Camb.) ♀外雌器. 4. *Wideria artica* (Wider) ♂頭胸部.  
 5. *Trochosa ruricola* (De Geer) ♂触肢. 6. *Philodromus rufus* Walck.  
 ♀外雌器. 1-4, Locket & Millidge (1953). 5-6, 同 (1951) より.

## DRAGLINE

### 未受精卵を食べるクモ

鈴木 勝浩

中平清氏はATYPUS No.6で「動物はなぜ自分の卵を食わないか」ということで、クモの場合について述べている。

私は今までの観察で、クモは受精卵であったから食べないが、未受精卵であつたら食べるクモもいるということがわかった。実際にクモが自分で産んだ卵を食べている場合は、ハリゲコモリグモでしか観察していないが、未受精卵を産んだクモの多くは、必ず産卵時から1日以内に食べてしましました。

未受精卵を食べたクモは、ヒメグモ科ではバラギヒメグモ・オダカグモ、キシダグモ科ではイオウイロハシリグモ、コモリグモ科ではウツキコモリグモ・ハリゲコモリグモ・カガリビコモリグモ、ハエトリグモ科ではオオハエトリグモなどです。しかし、キハダカニグモのように、未受精卵であってもずっと保護し続け、食べないクモもいました。

萱嶋先生の飼育されているアシダカグモのうち、未受精卵を食べたクモは一匹もいないとのことです。

これからも、これらのことと少しでも解決していくため、飼育観察を続けていきたいと思います。談話会の皆様も試みてはいかがでしょうか。

### 野帳から

蓮沼克己

1977年11月25日、厚木市農大農場内においてジョロウグモの卵のうを採集したところ、卵のうと卵のうをおおう保護用ネット(?)の間の空間で、アリグモ *Myrmarachne japonica* (Karsch) が2頭と共に♀の幼体一外観的にはカイコのマユ状をして中が2部屋に分かれている、たぶん越冬用と思われるネットをあたかも共有しているかのようにしているのを見つけた。しかし2頭共すでに死んでいた。腹部がしほんでいたので、餓死かそれとも水分不足で死んだのだろう。外傷らしいものは見当らなかった。うまく潜り込んだとしても2頭が隣り合せに越冬用ネットをつくり、さらにそれを一つのまゆ状のものにしてしまったこと。アリグモがどのくらいの気温で越冬に入るのかわからないので、はっきりしたことが言えないが、11月さえ越えられないものが出てくるだろうか。

1978年4月9日、山梨県北巨摩郡明野村に採集に行った。サクラの枯枝があったので折ったところ、越冬中のアリグモを見つけたがすでに死んでいた。今までに4例ほど越冬中に死んだアリグモ—いずれも♀の幼体一を見つけている。越冬ということがクモにとってかなりの試練になるのだろうし、越冬できずにかなりの個体数が死んでしまうだろう。越冬をするということが、天敵以外の生息調整になるだろう。なお、この日野外で活動するアリグモを始めて見た。

KISHIDAIA No.44 1979, Mar

1978年6月3日、神奈川県横須賀市長沢で、マミジロハエトリ *Evarcha allaria* (L.Koch) とネコハエトリ *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) の卵のうを、マミジロハエトリ2個、ネコハエトリ4個(うち1個は作りかけ)を見つけた。また、17日、逗子市池子町で、ネコハエトリの卵のうを1個見つけた。いずれの卵のうも広葉樹の葉を使っていたが、その使用法が2種で違っていた。マミジロハエトリは1枚の葉だけを使い、葉をたてに折りまげて葉脈の上に産卵していた。ネコハエトリは枝を中心に左右の葉を2枚合わせて産卵し、さらに近くにある葉を5・6枚一緒にかがり合わせていた。このような違いからか、マミジロハエトリは割り合いに大きなクズなどの葉を使い、ネコハエトリはフジやニセアカシアなどの葉を使っていた。

1978年6月17日、神奈川県逗子市池子で、アリグモが産卵準備をしているのを見つけた。♀が産室をつくってその中にいたが、その産室をおおうように粗雑なネットを張って、♂がその中で♀を保護しているようにネットを間にして並んでいた。観察中アリ(種不明)が3回ほど産室から3cmほどに近づくと、♀はすばやくネットから飛び出してアリを威嚇し、産室から遠ざけるとすぐに産室に戻っていった。そこで、産室の上に指を近づけて動かすと、その動きにつれて♀は動くが、♀は動くことがなかった。産室をこわしてみたが、産卵されていなかった。同日採集したアリグモが22日に産卵し、7月2日にフ化した。産卵数は37個であった。

## 編 集 後 記

気がつくのだがついつい見すごしてしまうクモの生活断片をするどい目で観察しつづける中平氏にはいつもながらに教えられるものが多い。生態では佐藤氏や鈴木勝氏が熱心でこれからが楽しみであるが、もっと多くの人が生態に関心を持つことを望み、かつ投稿を待っています。鈴木恵氏が述べているように、分類には多くの専門的な問題があり、このようなものは専門家にまかせてしまい、より多くの人がクモに親しみ、クモに聞きつつクモのことを理解してゆけば、分類以上に大きな成果があると思われます。小さな観察が集まって大きな全体が見えるようになるものです。

---

K I S H I D A I A No.44 1979年3月30日 印刷 編集者 熊田 慶一  
1979年3月31日 編集 発行者 萱嶋 泉  
発行所 東京蜘蛛談話会  
〒191 東京都日野市豊田1896 萱嶋 泉

印刷所 富士工房

〒194 東京都町田市原町田4-9-7